

混合タイプの言い誤りについて①)

寺尾 康

0. 序

近年、発話のメカニズムを解明するための数少ない有力な手がかりの1つとして、自然発話において起こる言い誤りという現象が注目を集めている。言い誤りとは、ごく概略的に「故意にはない、発話の意図からの逸脱」と定義され、さまざまなタイプ(付加、削除、交換等)の誤りが異なる言語学的レベル(分節音、形態素、語等)において生じることが報告されている。②)

特に、その中でも、含まれている情報量の豊かさで、最近、語彙部門(の解明)を扱った論文(Crompton (1981)、Stemberger (1982b), (1983))において、説得力のある証拠として示されることが多いのが、混合(blends)③)と呼ばれる言い誤りである。

本論では、自然発話において観察された混合タイプの言い誤りを手がかりにして、日本語発話メカニズム内の語彙部門の機能について若干の考察が試みられる。

1. 混合タイプの誤りとは

混合タイプの誤りとは、発話中に、ある語が入るべき1語分のスロットに、2語が競合する形で収まってしまったかの如き言い誤りを指す。以下はその実例である：

- (1) 「^みに^くる^しい^顔 (みにくい f みぐるしい)」 ※ f : fusionの意
- (2) 「いい^骨^ぬぎ^がな^ったよ・・・あれ、骨^休めと息^ぬぎが一緒にな^っちゃ^った」
(骨^休め f 息^ぬぎ)
- (3) 「・・・に御^注意^をつ^けにな^って^下さい」
(御^注意^下さい f お^気をつ^けにな^って^下さい)

(4) 「ミキちゃん、ミッキーマウスとフクちゃん」

(3) は文混合とでもいうべきもの、(4) は混合の材料となった語が脈絡中に認められる実例である。しかし、この種の誤りは、話者の語彙部門を反映した誤りというよりも、語を配列するレベルを反映したものと考えられるので(註4)本論では(1)、(2)の如き混合タイプの誤りのみを分析の対象とする。

2. FEリスト

過去四年間にわたり筆者が収集した2400例の言い誤りの実例中(註5)の、混合タイプの誤り53例について、語頭音、品詞、モーラ数、音声表記、アクセント型の各観点から分析を行い、本論末のFEリスト (Fusion Error List) を得た。以下は分析の結果とその考察である。

2.1. 実例とモーラ表記

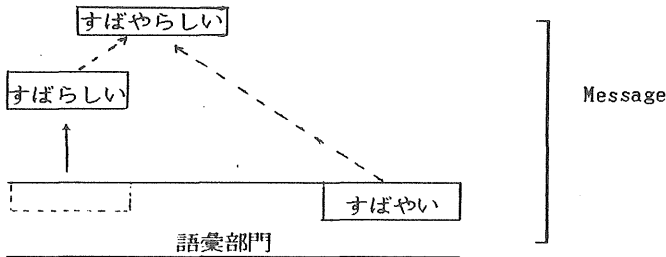
FEリストの第1項目には、何と言おうとして、どんな混合を起こしてしまったのかという意図と実例が、第2項目には混合の材料となった2語が記されている。例えば、第5例は、「すばらしい」と言おうとして、「すばらしい」と「すばやい」が混合してしまった結果、「すばやらしい」という言い誤りが生じた、と読むことができる。

したがって、混合のメカニズムを示す瞬時的モデルとして、まず、次のページにしめす図1が仮定される。

つまり、発話の意図を含んだ Messageのレベルでは、「すばらしい」の枠組が指定され、多元的ネットワークを持った手がかり(註6)をもとに語彙部門が走査される。本来ならばここで「すばらしい」が選択され、次のレベルに達するのであるが、何らかの原因によって、語彙部門内の他の所にあった「すばやい」が侵入してきて、「すばらしい」の入るべき枠組に同時に入ってしまったと考えられる。

ここで、別の角度から混合の過程をみてみよう。FEリスト第7項目で記されている混合材料のモーラ表記の上段、下段を線路に見立てて、出力となった誤りが得られ

図 1



られるように左から右へ辿ってゆくと、途中どこか1箇所ポイント交換が行なわれていることがわかる。リストでは' 'と記されている線路の切換えが起こる地点を、これも鉄道の用語で「ポイント」と呼ぶことにしよう。このポイントと混合の誤りの間には、いくつかの興味深い事実が観察される。

まず第1に、ポイントは、モーラとモーラの境界に現われ、モーラを構成する子音部分と母音部分との間にポイントが割って入ることは稀である、ということが指摘できる。つまり、リスト第6例の場合、「*ホネユキ」、「*ホニヌキ」といった出力は予想できないといえる。この仮説に対する反例は第4例の1例のみである。

このことは、発話のメカニズムにおいて、語彙部門という意味が関係しているレベルと最終段階の調音レベルとは、企図 (planning) の単位が異なるのではないか、という仮説を提案するヒントを与えてくれるように思われる。つまり語の選択の誤りや混合の誤りに反映される語彙選択の作業では、品詞、モーラ数、アクセント型等の、いわば漠然とした枠組のもとに、モーラ、あるいは形態素という比較的大きな単位が扱われる。一方、調音レベルの機能を反映しているとされる音の誤り(7)を調べてみると子音、母音という単位が関与していることは疑いがなく、さらにそれより小さな弁別素性という単位を考えることもできる(8)。以上から、企図の単位は、調音レベルに近づくにつれて小さくなるのではないか、という仮説が考えられる。

第二に、ポイントは1つの混合の誤りの中に原則として1箇所しか置かれられない、という事実があげられる。つまり、ポイントが2回交換されたと考えざるをえない。「*ホネヌキメ」のような例は皆無であった(9)。この理由に関して、現段階では明確な答えを与えることはできないが、第6例の場合は、形態素2つからなる語同士の交換であるので、計4つの形態素が語の始発と終端を示す情報を荷っていると考えられる。即ち：

図2

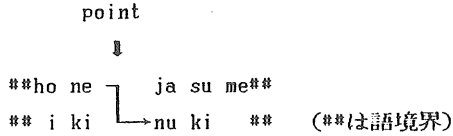


図2に示した通り、もし形態素→形態素を単位としてポイント交換が行なわれるならば、1つのポイントを交換した時点で終端を示す情報を含んだ形態素に到達してしまうので、そこから先は新たな処理が進行しなくなるのではないかと考えられる。しかし、この形態素-形態素の混合という仮説は、十分に証明するための実例数に現段階では恵まれていないことが考慮に入れられなければならない。

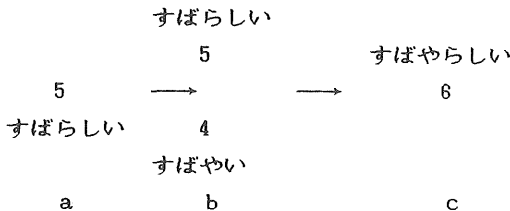
2.2. 混合材料の音的特性

2.2.1. 語頭音

まず、混合材料の左から右への音声的な類似の傾向を知る手がかりとして語頭音の一致度を調べる。一致するものに`○`、しないものには`×`という表記に従ってFEリスト第3項目の結果を得た。一致するものは24例中 9例であった。これは、同じく語彙部門が関与していると思われる語の選択の誤りでの調査結果に比べて低い数値であるといえる。混合が起こるレベルでは音声の情報よりもむしろ、意味的な情報がより大きくかかっているのかもしれない。

2.2.2. モーラ数

混合された2語のモーラ数は、リスト第6項目に記されている。この欄では以下のような表記法が採用されている。例えばリスト第5例は:



と表記される。a, b, c はそれぞれ、意図した語、混合材料、出力のモーラ数であ

る。

まず b の数字から検討してゆく。混合の対象となった 2 語がモーラにしていくつ違いがあるかを調べると次の結果が得られる：

表 1	総数	24	モーラ数が	同じ	…	8例
				1つ違う	…	14例
				2つ違う	…	2例

表 1 をみる限り、混合の対象となった語は、ほぼ同じ長さの語であるという結論は妥当なものであろう。次に、a、c の数値をみると、意図がはっきりしている 19 例中 13 例が a と c の一致をみている。このことは図 1 で示したように 1 つの枠をめざして、2 つの語が競合するように混合しても、もともと指定されていた長さ（モーラ数）は変わらなかったということ意味する。さらにこの事実は、発話の意図にあわせて目標となる語が決定される際に、その語がどれ位の長さか、という情報が重要であることも示しているといえよう。

2.2.3. アクセント型

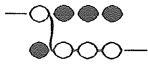
F E リスト第 7 項目では、混合された 2 語のアクセント型が調べられている。記述方法としては、1 モーラに ○ 印 1 つを対応させ、ピッチが「高」のモーラには ●、「低」の部分には ○ を付与するという方法が採用された。

注目すべき特徴は、以下に述べる 2 点である。まず、意図した語のアクセント型が、混合が起こった後も維持されることである。(5) はその実例。リスト第 3 例参照。

(5) すばらしい — すばやらしい
○●●●○ ○●●●●○

ここで、前述の音声表記の場合と同じくアクセント表記の ○●… の列にポイントを設定しても、アクセントの維持が予測できないことは注意を要する。(6) はその実例である。

(6) ニホンの



※ ニトーの (実際は○●●●●)

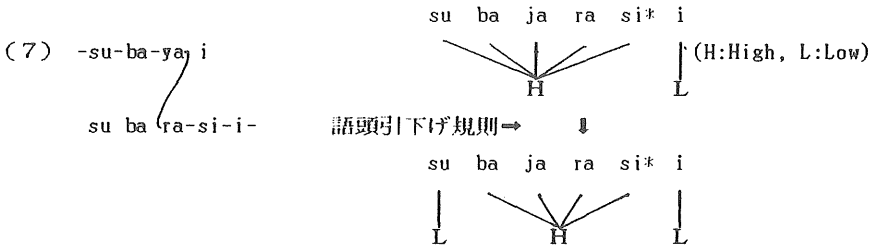


ナトーの (NATOの)

このことは、モーラを含む分節音のレベルと、高、低の音調という超分節音のレベルが独立していることを示す証拠であると思われる。

ここで、この両レベルの独立を個別的規約として理論の根本に据えている自律分節理論^⑩を用いて、アクセント型維持の記述を試みると、(5)の場合だけでなく、(6)の実例も処理することが可能である。

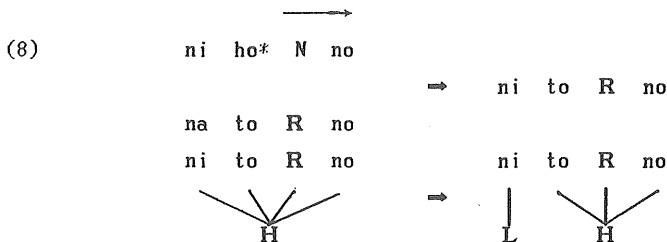
まず、(5)を記述した(7)では、LHLの音調は維持される。なぜなら、対応線は交差しないという適格性の条件により、/ra-si*-i/に移っても、HLの型は変わらないからである。



次に(6)は、以下の手順で自律音節理論内で説明される。まず「の」が後続する場合に適用されるスター脱落規則により、「日本の」のアクセントがなくなる。次に混合した結果の「ニトーの」の母音が改めてHと結びつけられる。最後に語頭引下げ規則がかかって、LHが得られる^⑪。次のページの(8)を参照。

第2の特徴は、混合材料となった語のアクセント型は24例中19例が一致したことである。ちなみに内訳は、頭高型5例、中高型10例、平板式4例であった。

この事実も、前述のモーラ数同様、語彙決定の際の手がかりとしてのアクセント型の重要性を支持する証拠と考えられる。



2.3. 混合材料の品詞及び意味的特徴

2.3.1. 品詞

FEリスト第4項目は、混合材料の品詞が略号で表記されている。表2の通り、実例はすべて同じ品詞の語同士による混合であった。

表2 名詞 (N) - 名詞 19例 形・形動(Adj) - 形・形動 2例	動詞(V) - 動詞 2例 副詞(Adv) - 副詞 1例
--	---

語彙部門、あるいは、そこから語彙が引き出されるレベルで、既に目標の語が選択される手がかりの1つとして、その語がどの文法的範疇に属するかが指定されているのではないかと考えられる。

2.3.2. 類似性

混合材料の意味的な特徴からは、「全く無関係ではなく、多面的な類似性をもつ」という結論が導かれる。「多面的」の具体的な内容としては以下の要因が考えられる。

まず、語自身の意味が類似しているもの。「ひさびさ f ひさしぶり」、「骨休め f 息抜き」、「男っぽさ f 男らしさ」、「みにくい f みぐるしい」、等の類義語同士による混合に代表される。また、類義語とは呼べないまでも、「おてつだい f おつかい」は内容-行為、「管理職 f エリート」は「集団のトップ」という関係、「法政 f 専修」、「上宮 f 富士宮北」はテレビ中継された試合の対戦高という関係の下に、同じ場にある語同士が混合されたものであろう。

次に、事実に関しての類似性を持つと思われる語同士の混合も観察される。例え

ば、「百恵 f 友和」、「田原俊彦 f 近藤真彦」は有名芸能人という事実からくる混合であろう。

その他には、「こんど f じゃあ」、「おまち f まで」のように、語の使われ方に関する要因に影響されたものもあげられる。

ここで、非常に興味深い事実は、語の選択の誤りにおいて数多く観察される反意語、あるいは反対概念がかかわっている意味的な誤りが、同じ、語のレベルで起こる混合には1例も見出せなかったことである。これが、偶然による結果であるのかは、現在の実例数から即断することはできない。しかし、Garrett(1975) pp.174等で英語においても同様の傾向があることが指摘されており、後者の可能性が高いように思われる。そこで、今後検証されるべき暫定的な立場として、本論は、後者の側に立って議論を進める。

2.4. 混合の原因と考え得るモデル

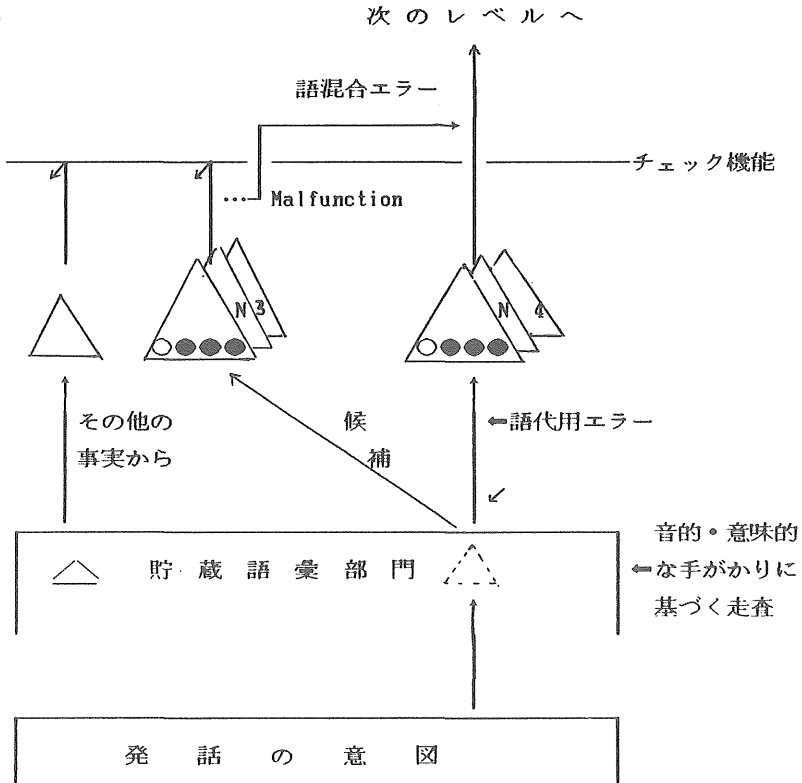
前節までの議論を総合すると、語混合タイプの誤りが起こる原因は、多元的な類似性にあるといえよう。多元的というのは、混合材料の音的類似性（モーラ数、アクセント型）と意味、統語的類似性（同意語、同じ場、同品詞）が複雑に連絡しあった結果、混合が起ったことを指す。特に、語混合タイプのエラーの場合は、意味的な類似性が重要な役割を果しているように思われる。

次に、混合の言い誤りから考え得る語彙部門のモデル化を試みる。

混合の材料となった語をみると、語の選択の誤りの場合とは異なり、「A f B」のどちらの語をとっても発話の意図は満たされることが多い。また、2語の間には、音的、意味的な類似性がみられる。これらの事実から、発話メカニズム内の語彙部門においては、発話の意図に基いた操作の結果、貯蔵されている語彙の中から適切な語として引き出されるのは1語であるとは限らず、2つ以上の「候補」が同時に存在すると考えられる。ところが、実際に発話される語は当然1つであるから、発話メカニズムの中間段階にこれらの「候補」の中から1語を選び、他を排除するチェック機能が備わっていることが予想される。その存在については、混合という言い誤りが起るのは、その機能がうまく働かなかったからだ、という証拠が与えられよう。

以上をまとめると、概略、次のモデルが考えられる。

図3



3. おわりに

発話のメカニズムを探る、という研究がまず直面するのは、「話者の意図」なる得体の知れぬ霧の中で、十全な議論をするための手がかりをどこに求めるか、という問題である。目下のところ、筆者の知る限り、言い誤りという現象を多方面から分析することが、この問題に対する1つの現実的かつ有効な解決法である。

その意味で、言い誤りに関する言語学的な興味は、事例収集にかかる時間と労力を

補って余りあるもののように思われる。今後、より多くの実例を背景にした批判、検討が本論に加えられることを望んで結びにかえたい。

【注】

- 1) 本稿は昭和58年度、筑波大学文芸言語研究科に提出した博士課程中間論文の一部に加筆修正を行なったものである。論文を執筆するにあたり、筑波大学現代語現代文化学系の原口庄輔助教に指導を受けた。ここに記して感謝したい。
- 2) 言い誤りのタイプとレベルの実例は寺尾(1983) (日本語の実例) Fromkin (1973 appendix) (英語の実例) を参照。
- 3) この誤りは通時的には混淆 (Kontamination) と呼ばれ、H. Paul が一早くとり挙げた現象であるが、発話中に突発的に現われる混淆は、言い誤りを扱った心理言語学の論文では 'blends' 'fusion' と呼ばれる。筆者は「混合」と訳語をあてる。
- 4) このことは読み誤りを扱った田総 (1982) の資料中、混合タイプの誤りが極端に少なかったことから支持される。
- 5) 実例の具体的な収集方法については寺尾 (1983) 参照。
- 6) 寺尾 (1983) では、「ケーキにハサミ…ナイフを入れる」、「このままユ、ツユになる…」といった、ある語を用いるべきところに別の語が侵入してきた言い誤りが語彙部門での語彙選択プロセスを探る上での有力な証拠として分析されている。寺尾 (1983) は、目標語と侵入語の間には意味的な関係 (反意語等) があるのみならず、統語的・音的特徴 (品詞・モーラ数・アクセント型) も多くの場合一致することが報告されている。
- 7) 例えば、「打点サラのハラ (←打点3)」「セシビ眼 (←審美眼)」のごとき誤り。
- 8) 神尾・外池 (1979) では、「トダナ→トナダ」という誤りは、[±鼻音性] という弁別素性のスイッチによって説明できるとしている。
- 9) リスト中 \square とあるのは、混合材料に共通するモーラがあったために、ポイントを一カ所にしぼりきれなかったためであり、2カ所でポイント交換が行なわれたことは意味しない。
- 10) 本論では深く立ち入らない。Haraguchi, S. (1975) 等を参照。

- 11) (6) の実例には、違う立場からの説明も可能であることを、筑波大学文芸・言語学系の城生佰太郎先生から御教示いただいた。つまり、未知の4モーラ語に一般にも最も好まれる型は、まさに「○●●●」であり「ニトウの」の「○●●●」はこの影響によるものという説明も可能である。

《語混合タイプ FEリスト-1》

No.	実 例	意図 (空欄は不明)	混合材料	語 頭	品詞
797	みにくゝるしい顔		みにくい みぐるしい	○	Adj Adj
787	ひさびゝしぶりのルーキー		ひさびさ ひさしぶり	○	形動 形動
937	カゝリート	エリート	管理職 エリート	×	N N
947	バックネットのうれ	うえ	うえ うら	○	N N
473	すばやらしいスピード	すばらしい	すばらしい すばやい	○	Adj Adj
1039	骨ゝぬき		骨休め 息ぬき	×	N N
1936	おてゝつゝかい		おてつだい おつかい	○	N N
1943	もゝもゝかずさん	ともかずさん	ももえ ともかず	×	N N
1946	映画ジョゝウゝロ(ン)	映画ジョウホウ	〜じょうほう 〜ひょうろん	○	N N
1948	こんゝじゃ	こんど	こんど じゃあ	×	N N
1954	ホウゝシュウ	法政	法政 専修	×	N N
1957	べゝップテン	ベストテン	ベストテン トップテン	×	N N
637	ニゝトウ	ニホン	ニホン ナトウ	×	N N
1046	コゝクゝリョウ難	食糧難	こくもつ しょくりょう	×	N N
2132	ユゝカタ州	ユタ州	ユタ ネバダ	×	N N

モーラ数	モーラ表記	アクセント型	○ ●	メモ
$\frac{4}{5} 6$	-mi-ni-ku i mi gu } ru-si-i-		● ●	
$\frac{4}{5} 6$	-hi-sa-bi sa hi sa } si-bu-ri-		● ●	
$\frac{4}{4} 4$	-ka N ri sjo ku e } ri-R-to-		○ ●	
$\frac{2}{2} 2$	u } e- -u-ra		● ●	モーラ内にポイントがある
$\frac{5}{4} 6$	su ba } ra-si-i- -su-ba-ja i		● ●	
$\frac{5}{4} 4$	-ho-ne } ya su me i ki } nu-ki-		● ●	同義語同士の混合
$\frac{5}{4} 5$	o te } tsu } da i o } tsu } ka i			
$\frac{3}{4} 4$	-mo } mo } e to } mo } ka-zu			
$\frac{7}{7} 7$	-zjo } R } ho R hyo } R } ro-N-			アクセントは複合語の場合
$\frac{3}{2} 4$	-ko-N } do } zja-a-		○ ●	
$\frac{4}{4} 4$	-ho-u } se i se N } sju-R-		● ●	
$\frac{5}{5} 5$	-be } su to te N to } pu-te-N		○ ●	
$\frac{3}{3} 3$	-ni } ho N na } to-u-		○ ○	意図した「ニホン」のアクセントは崩れない
$\frac{4}{4} 4$	-ko } ku } mo tsu o } ku } ryo-R-			
$\frac{2}{3} 3$	ju } ta ne } ba da			「ユカタ」という出力、b→k, d→t, 「浴衣」?

《語混合タイプ FEリスト-2》

No.	実 例	意図（空欄は不明）	混合材料	語 頭	品詞
2126	ほっとっというて	ほっぽっというて	ほっぽっというて ほっというて	○	Adv Adv
2111	男っぽゝらしさ		男っぽさ 男らしさ	○	N N
1017	上宮ゝ北高校	上宮高校	富士宮北高校 上宮高校	×	N N
1955	田原ゝまさひこ	田原としひこ	田原俊彦 近藤真彦	×	N N
1824	こうゝだにわたる活躍	とうだ	攻守 投打	×	N N
1821	ニッチャクは	イッチャクは	イッチャク ニチャク	×	N N
929	規則にタゝンして	対して	対して かんして	×	複V 複V
2207	おまで！	おまち！	おまち まで	×	V V
2209	ウェディング ベチ	ウェディングマーチ	～マーチ ～ベル	○	N N

モーラ 数	モーラ表記	アクセント型	○ ●	メモ
7 5 7	ho Q po Q-to-i-te- -ho-Q-to i te	○●●●●○○○ ○●●●○○	● ●	
6 6 8	-o-to-ko-Q-po sa o to ko ra-si-sa	-○●●●●○ ○●●●○○○	● ●	
5 5 7	hu zi no mi-ya ki-ta- -u-e-no mi-ya-	○●●●●●● -○●●●●●		～宮という共通項
7 7 7 8	-ta-ha-ra- to si hi ko ko N do R ma-sa-hi-ko-	-●○○○○○○○ ○●●●○○○○○	○	アイドルタレントとい う事実の類似性
3 3 3	-ko u- sju to R da-	●○○○ ●○○○		
4 3 4	i tja-ku- -ni tja ku	○●●● -●○○	● ●	
4 4 4	-ta i (si te) ka N-(si-te)-	-●○○○ ●○○○	● ○	
3 2 3	-o-ma ti ma te-	○●●● ●○○	● ○	
8 7 7	~ma R ti- ~be ru	~●○○○ ~●○○○	○ ●	

【参考文献】

- 神尾昭雄・外池滋生 (1979) 「言い間違いの言語学」、『言語障害と言語理論』、
pp. 271-308、今井邦彦(編)、大修館。
- 田総武光 (1982) 『言葉のとちり』、今井書店。
- 寺尾 康 (1981) 「言い誤り研究—発話のメカニズムをめざして」、学士論文、筑
波大学。
- (1983) 「発話のメカニズムについて—自然発話における言い誤りを資料
として—」、博士課程中間論文、筑波大学。
- Crompton, A. (1981) Syllables and segment in speech production. Linguis-
tics 19, 663-761.
- Fay, D. A. & Cutler, A. (1977) Malapropism and the structure of the mental
lexicon. Linguistic Inquiry 8, 505-520.
- Fromkin, V. A. (ed.) (1973) Speech Errors as Linguistic Evidence. The
Hauge: Mouton.
- Garrett, M. F. (1975) The analysis of sentence production. In G. Bower
(ed.) The Psychology of Learning and Motivation. Vol. 9. N. Y. : Aca-
demic Press.
- Haraguchi, S. (1975) The Tone Pattern of Japanese: An Autosegmental Theory
of Tonology. Ph. D. Dissertation, M. I. T.
- Hotopf, W. H. N. (1980) Semantic similarity as a factor in whole-word
slips of the tongue. In V. A. Fromkin (ed.) Errors in Linguistic Per-
formance: Slips of the Tongue, Ear, and Hand. N.Y.: Academic Press.
- Shattuch-Hufnagel, S. (1979) Speech Errors and Sentence Production.
Ph. D. Dissertation, M. I. T.
- Stemberger, J. P. (1982b) The nature of segments in the lexicon: evidence
from speech errors. Lingua 56, 235-59.
- (1983) Speech Errors and Theoretical Phonology: A Re-
view. Bloomington: Indiana University Linguistic Club.

On Blends

Yasusi Terao

The purpose of this paper is to explore the structure of the mental lexicon, using Japanese word-blends data that occur spontaneously in speech. The conclusions obtained in this paper are as follows;

- i) A cross-over point (that marks the endpoint of one piece of information and the startpoint of the next) falls on the boundary between moras, not between segments. And cross-over point appears only once in the process of blending.
- ii) Target word and the blending word share several properties, such as grammatical category, number of moras, and accent pattern.
- iii) The semantic relation between target word and blending word is usually synonymous, while a considerable percentage of word selection errors involve antonyms.

From these facts, we can make at least two comments on the process of mental lexicon. First, the basic performance unit in the lexicon is mora. Second, more than one 'candidate' are retrieved from the permanent lexicon and at the output component of the lexicon, there exists a checking procedure which determines the appropriateness for the next stage. Word blends may occur when the checking procedure malfunctions.